

三・一独立運動の写真を見ると女性が多いのですが、
当時朝鮮では女性の社会的活動は活発だったのですか？

19 19年3月1日におこった三・一独立運動は、100万人以上の朝鮮人が参加したといわれており、日本の植民地時代(1910~45年)の朝鮮で最大規模の独立運動です。従来の朝鮮独立運動は、学生や知識人が中心となって、武器を集めて武装団体を組織したり、諸外国の政治家に独立への援助を求めたりするものでした。一方、三・一独立運動は、学生や知識人だけでなく農民をはじめとする民衆が、「独立万歳」を叫びながら朝鮮全土で2カ月以上デモ行進を繰り広げた運動でした。また、女性が参加したことも、この運動の大きな特徴です。現在、韓国では3月1日が祝日になっていますが、その理由は三・一独立運動が最大規模の独立運動だっただけでなく、身分や性別をこえて、広く朝鮮の人々が参加した運動だったからでもあります。

ソウルの女学生の写真

教科書(『詳説世界史(世探704)』ではp.293)に載っている写真(図)は、3月1日にソウル(植民地時代は京城と呼ばれていました)で撮影されたものです。たしかに写真を見ると、三・一独立運動には多くの女性が参加している印象を受けますが、実際はこの写真以外に、デモに集団で参加する女性の写真はあまり残っていません。

実は、この写真を撮影したのは日本の新聞社でした。当時、ソウルには大阪朝日新聞社と大阪毎日新聞社の支局があり、3月1日にソウルでデモがおこった2日後の3月3日から紙面で報道しはじめます。『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』に共通しているのは、デモに女性が参加していることを、驚きを



図 デモに参加する女学生の写真

もって報道していることです。とくに『大阪朝日新聞』は、3月3日付の紙面で男子学生にまじって「数十名の女学生」が参加していたことを太字で強調し、5日付の夕刊ではデモ行進する女学生の写真まで載せています。

この写真が三・一独立運動を代表する写真の1つとなり、韓国の教科書や資料集はもちろん、日本の教科書などでも使われることになりました。

もっとも、デモに参加した女性の写真があまり残されていないことが示すように、運動に参加したのは男性の方がはるかに多かったことは間違いありません。実際、当時中等学校以上の学校に通っていた生徒・学生の数を見ても、女性は男性の半分にもおよんでいません。しかし、女性が集団で独立運動に参加することは三・一独立運動以前にはほとんどみられなかったことであり、だからこそ日本の新聞社も注目したのだらうと考えられます。

「良妻賢母」を求める独立運動

それでは、当時の朝鮮の女性の社会的役割はどのようなものだったのでしょうか。

朝鮮王朝時代(1392年～)の朝鮮は、儒教の影響によって男尊女卑の観念が強い社会だったため、女性は男性に隷属する家事従事者として扱われてきました。こうした状況を大きくかえたのが、1905年の日本による保護国化という国家的危機です。

保護国化以降、朝鮮では日本に植民地化されるのをくいとめるため、抗日運動が活発化します。抗日運動の担い手は男性でしたが、女性にも運動に参加する夫を支えると同時に、未来の運動の主体となる子どもを産み育てる「国民の母」としての重要な役割があると認識されるようになりました。その結果、保護国期の朝鮮では「良妻賢母」を養成するための女子教育機関がいくつか設立されました。

このように保護国化という国家的危機は、家事従事者から抗日運動を支える良妻賢母へと朝鮮女性の役割の見直しをせまり、依然として男性中心的ではあるものの、女性の社会的役割を変化させました。

1910年に朝鮮が日本の植民地になって以降もこの傾向は続き、男性が担い手である独立運動において、朝鮮女性は良妻賢母として民族独立を成し遂げるために男性に従い、支えることを求められました。一方、統治国である日本は、朝鮮女性の社会進出や女子教育にはあまり関心を示さず、支配体制に従順であることを要求しました。

三・一独立運動はこうした社会状況のなかでおこった身分も性別も関係ない民衆参加型の運動でした。つまり、それまで独立運動に参加するのは男性の役割であり、女性は良妻賢母として家庭を守ることで運動を支える存在だったのに対し、女性も男性とともに直接独立運動に参加する画期となったのが、三・一独立運動だったといえます。

そして三・一独立運動によって独立運動の主体としての女性が「発見」された結果、1920年代に入ると朝鮮女性のおかれている状況も少しずつかわっていきます。

たとえば、1920年に中国の上海で設立された独立運動団体の大韓民国臨時政府には、女性の独立運動家も参加しました。27年には朝鮮で女性の独立運動団体である^{きんゆうかい}権友会も設立されます。また、独立運動だけでなく、医者や芸術家、作家、知識人として活躍する女性も台頭するなど、ごく一部の女性に限られてはいましたが、社会進出もみられるようにな

っていきました。

二重の支配からの解放

しかし、女性が良妻賢母としてではなく、活動家として男性とともに朝鮮独立運動に参加するようになって、男性中心的な傾向はかわりませんでした。むしろ、独立運動に参加することで、女性と男性の関係が対等でないことを実感し、男女平等を主張する女性も現れるようになります。

この傾向は、とくに日本に留学する朝鮮人女子留学生に顕著でした。当時日本では青鞥社の平塚らいてうらが女性の地位向上を訴えるなど、婦人解放運動が本格化しはじめていました。こうした日本の空気を吸いながら、一部の女子留学生は男子留学生とともに独立運動に参加しました。

たとえば、1917年に東京女子医学専門学校に留学した黄エスターは、三・一独立運動がおこる少し前の独立運動計画を話し合う会議で、「民族の大事を男性だけでおこなうというのですか？ 車は片方の車輪だけで走れません」と、女性の存在を軽視する男子留学生を批判したといえます。彼女はその後、上海に渡り大韓民国臨時政府で活動します。

1927年に朝鮮で設立された権友会は独立運動団体でしたが、この団体がめざしたのは民族独立だけではありませんでした。権友会の女性活動家は、朝鮮の女性は日本から、そして男性からの二重の支配を受けていると認識しました。しかし、多くの独立運動団体は、女性の解放については二の次、あるいは無関心でした。そのため権友会は、日本と男性による二重の支配からの解放をめざしたのです。

このように、日本の支配からの解放をめざした朝鮮独立運動は、その内部に男女の不平等という深刻な問題を終始抱えながら展開しました。

参考文献

宋連玉「2・8独立宣言に関わった女子留学生」在日韓国YMCA編『未完の独立宣言——2・8朝鮮独立宣言から100年』(新教出版社、2019年)

田中美佳『朝鮮出版文化の誕生——新文館・崔南善と近代日本』(慶應義塾大学出版会、2022年)

朴宣美『山川歴史モノグラフ10 朝鮮女性の知と回遊——植民地文化支配と日本留学』(山川出版社、2005年)

(おの・やすてる／九州大学大学院人文科学研究院准教授)